

# 花ちゃん、オー君、モンツキ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成27年2月17日 NO.86 (186)



ジョウビタキ

ジョウビタキ「ちょっと後ろ向きでごめんなさい！わたしがジョウビタキです。」

オー君 「オレンジと白と銀色できれいな鳥ですね。」

ジョウビタキ「そんなにほめてもらってうれしいね。」

花ちゃん 「ジョウビタキは冬鳥ですね。」

ジョウビタキ「そうだよ。平地や低山、住宅地、公園、河原などあちこちにいるんだ。

この前は、ちよいと国立七小のうら庭に遊びにいったんだ。」

オー君 「ジョウビタキって、何だかちよいとむずかしい名前ですね。」

ジョウビタキ「そんなことないよ。ジョウとは、「尉」で銀髪のことなんだ。ヒタキというのは、「火焚」で、火打石をたたく音に似た声を出すことから、この名前になったということさ。」

花ちゃん 「そうなんですか。わたし、初めて知りました。白い斑点もようもおしゃれな感じですね。」

ジョウビタキ「そうだろう。この斑点を着物の紋に見立てて、モンツキドリなんて呼ぶ地域もあるそうなんだ。」



- オー君 「あ！これはよく見<sup>み</sup>かけるカルガモですね。」
- 花ちゃん 「そのとおり。よく見<sup>み</sup>かけるのも当然<sup>とうぜん</sup>で、一年<sup>いちねん</sup>中<sup>じゅう</sup>日本<sup>にほん</sup>にいるカモはこのカルガモだけです。」
- オー君 「そういえば、この前<sup>まえ</sup>の全校朝会<sup>ぜんこうちょうかい</sup>で校長先生<sup>こうちょうせんせい</sup>が、カルガモは漢字<sup>かんじ</sup>で『夏留ガモ』と書<sup>か</sup>いて、夏<sup>なつ</sup>も日本<sup>にほん</sup>に留<sup>とど</sup>まるという意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>だと教<sup>おし</sup>えてくれました。」
- 花ちゃん 「ほとんどのカモは冬鳥<sup>ふゆどり</sup>だけど、このカルガモみたい<sup>いちねんじゅうにほん</sup>に一年<sup>いちねん</sup>中<sup>じゅう</sup>日本<sup>にほん</sup>にいる鳥<sup>どり</sup>を留<sup>りゅう</sup>鳥<sup>ちょう</sup>というそうよ。」
- オー君 「ふーん。そうなんだ。いろいろと勉強<sup>べんきょう</sup>になるね。ところで、カルガモはいつもどんなもの<sup>た</sup>を食<sup>た</sup>べるのですか。」
- カルガモ 「そうだね。水面<sup>すいめん</sup>を泳<sup>およ</sup>ぎながら、水草<sup>みずくさ</sup>や水辺<sup>みずべ</sup>の草<sup>くさ</sup>の実<sup>み</sup>などをよくついで<sup>た</sup>食べているよ。」
- 花ちゃん 「カルガモはあちこちの川<sup>かわ</sup>や池<sup>いけ</sup>などにふつうに見<sup>み</sup>られるカモですね。わたし、カモのタマゴを見<sup>み</sup>つけたことがあるもん。」
- カルガモ 「そうだね。タマゴがかえって、6月<sup>つ</sup>～7月<sup>ある</sup>ころに、かわいいヒナを連れて歩<sup>ある</sup>いている様子<sup>ようす</sup>がニュースなどで報<sup>ほう</sup>じられたこともよくあるんだ。」
- オー君 「カルガモの大き<sup>おお</sup>な特<sup>とく</sup>徴<sup>ちょう</sup>って、何<sup>なん</sup>なんですか。」
- カルガモ 「ちょっと口<sup>くち</sup>ばしが黄<sup>きいろ</sup>色<sup>いろ</sup>いんだ。羽<sup>はね</sup>の色<sup>いろ</sup>はオスメスあまりちがいがいいね。」